学苑　第八二八号　二～一〇（二〇〇九・一〇）

『我身にたどる姫君』論

――女帝と前斎宮――

大倉　比呂志

一

『我身にたどる姫君』において、巻五と巻六とは並びの巻と称されており、女帝とその異母妹である前斎宮との描写は、〈聖帝〉である女帝と常軌を逸した前斎宮という対照的な人物造型がなされていると理解されてきたわけだが、辛島正雄によって、

女どうしでしか強い絆を結ぼうとしないのは、（私云―女帝は）精神的にはすでに十分レズビアンだといってよいと思うのである。とすれば、女帝と前斎宮の物語は、レズビアンの物語として共通の基盤に立ちながら、異なる二つの方向性を指し示していることになろう。(1)

という新視点による把握がなされ、それを小島明子が「肉体的な同性愛者である前斎宮に比して、その対極に位置するかのように見える女帝もまた精神的な意味での同性愛者である」(2)と的確に要約しているように、女帝と前斎宮との〈類似性〉に立脚した論が提示されたのである。確かに辛島論は画期的な視点であり、小稿もその驥尾に付して両者の人物造型における〈類似性〉と〈対照性〉とに関していささか論述していきたいと思う。

二

嵯峨帝（後に嵯峨院）と嵯峨女院との間に生まれ、三条帝（後に三条院）の承香殿女御として入内し、三条帝より譲位された女帝は、

○雨風の音・月星の光まで、あまりまことしからぬまで、世に見ならはぬさまにのみ治まり静かなる御代を、……心なき草木まで靡ききこえさせて、……(3)（巻五④一五）

と傍線部によって〈聖帝〉であることが語られ、さらに、「もとよりかぎりなくらうらうじく、いたり深かりし御心おきて」（巻五④一六）とあるごとく、利発であって、女帝が詔書における字の脱落を指摘したことに対して民部卿が、

○「おろかなる翁の失錯仕うまつらざらましかば、我君の聖明は顕はれおはしまさざらまし。六代聖代に仕うまつりて、いみじき明王にも遭ひたてまつれるかな」としほたれたまふ。（巻六⑤九三）

と傍線部のように語り、三条帝が頭中将に女帝のことを「『ただ一度見つるものを、長く忘れぬ人におはすれば、いづれの人かおよぶべき』」（巻六⑤一〇六―一〇七）と評価し、「『変化の人』」（巻六⑤一〇七）であると判断して、女帝として即位することを決心したのだと述べている点からも、女帝の〈聖帝〉であることが証明されているのであり、女帝は〈政治の管理者〉としての能力を充分に発揮しているのである。そのことは女帝の崩御後、「（悲恋帝ノ）御即位の儀式などにつけても、ただめづらしかりし（女帝ノ）御世を忘れたまふ人なし」（巻七⑥三一）と語られていることによっても、故女帝の傑出性が証明されているのである。

さらに、この女帝は「あやにくにつくろはせたまふ事もなき御さまかたち」（巻五④一六）とあることにより、質素に心がけ、そのうえ、「け近やかにて御物語・戯れなど一言葉ものたまはせ慣したる事もな」く、「こまやかに私びたる事いささかもまじらはず」（以上、巻五④一七）とあり、

○男も女も、あまたつらねて物をも言ひかはし、戯れをもするならで、ひとりまにうちささめきなどするならひもなくなりにしかば、みなの事けざやかに隠れもなくのみもてつけたる用意、まことにきらきらし。（巻五④一八）

○何事もただすがすがと整へられつつ、御髪などかきくださるるまで、つゆばかりの程も経ず。せめて目やすくおはします御癖に、……（巻五④二三）

とあるように、無駄口をたたかず、迅速に事を処理する女帝、あるいは女帝によって教育された宮廷人が語られているのであって、それは〈聖帝〉としての女帝による教育の賜物であると考えられる。これらのことによっても、女帝が〈聖帝〉としての能力を充分発揮していたといえよう。

一方、女帝にとって異母妹に当たる前斎宮（母・御匣殿）を、女帝を思慕している宮中将（後に右大臣）が「ありふるままの心尽しを思ひさまさぬ慰めにも、紫の色や通ふ」と思って、垣間見したところ、「首を抱きてぞ臥し」て、「衣の下も静かならず、何とするにか、むつかしうものぐるほしげなる」（以上、巻六⑤一四）状態に表象されているごとく、前斎宮は侍女と同性愛に耽っており、そのことは、

○伊勢よりは、中将とぞいひし、なにゆゑにか、限りなく御おぼえにて、夜昼ひこじろひ、泣きみ笑ひみ、離れたまはざりし程に、……（巻六⑤二一）

○この人（＝前斎宮）にその事となく、（小宰相の君ハ）付きまとはれて、大将（宮中将のこと）の見たまひつるやうに、衣を引き被き、首を強く括りて寝たまへれば、……いとど取りて顔に顔を当てて離れたまはぬほどに、……（中将の君ガヤッテ来タノデ、小宰相の君ハ）長押より下るれば、「君（＝小宰相の君）さへやまた捨てたまふべき」と、手を引き寄せてしほしほと泣きかけたまひ、……「あなわびし。いかにもきこえやる方なし。ただ此方此方」と引き寄せて、「さらば、わが言はむ事違へじや。言ふままならんや。誓言立てたまへ。まろも立てん」など、さまざま日ぐらし取りつきておはす。……「宰相の君、こなたへ」と（前斎宮ハ）離れおはして、障子引き閉てて、隙なくて臥したまへり。（巻六⑤二二―二四）

とあるごとく、執拗に語られているのである。前斎宮は同性愛ばかりではなく、

○大夫の君（＝新大夫）、知る縁ありて、いかが構へけん、源中将とていみじう優なる若君達、語らひつけてけり。……例の武蔵野の草（注―女帝と姉妹であること）のむつましさに進まれし道なれど、いみじくもの憂きを、隙なきひのくま川の巻きかくるやうなるに、……（巻六[5]八六―八七）

とあり、傍線部の「ひのくま川」に「熊皮」をかけて女陰を暗示すると指摘されているように、(4)前斎宮が異性に対しても積極的な姿勢を示しており、それはいわば〈女すすみ〉の状況であって、(5)〈性の管理者〉としての様相を帯びているのだといえよう。すなわち、〈管理者〉という点からすれば、領域は異なるものの、女帝と前斎宮とは類似しているのだ。

ところで、

○内には、若き人々、三位の御局にてありし物語（注―新宰相の典侍ノ局ニ前斎宮付キノ侍女デアル大弐の君ガ来テ、前斎宮ノ遺産ノ管理役デアル大納言の君ガ物品ヲ持チ出シタトイウ話ヲシタコト）せさせて、いたづらなるままに、三笠野がまたまねび、丹波の内侍ものいとをかしく言ふ人にて、みそかに言ひ続くるに、聞くかぎり笑へば、御手水の間に中納言の典侍のおはするも、うち笑ひたまふ。「さよ」と（女帝ハ）聞しめして、典侍召し寄せて、「この物笑ひこそいとあひなけれ。その言ひ続くるなる事は、斎宮の御うへにこそ。上人など漏り聞かば、『かの御子の御うへを、内わたりの言わざになん』などとりなさば、いとほしかるべきを」と、御気色よろしからぬを、心得て、あるかぎり色もなくなりて、またまねぶ人なし。（巻六[5]九二）

と語られた後、丹波の内侍は「人よりことに、誇りかにをかしきさまなる人の、名残なく屈じしぼみて、衣のおとだに忍びつつみ、御前にもさし出で」（巻六[5]九二）ない状態となったために、女帝は「重からぬ事ゆゑ、常に召し使ふ内侍が恐れたる、いとほしく思しめし」（巻六[5]一〇〇）た結果、母嵯峨女院の一周忌が過ぎた頃、丹波の内侍を筆頭に、右近の内侍・中納言の典侍・新宰相の典侍の四人を呼び寄せて、女帝の近習者たちに故嵯峨女院の形見である扇とお守りとを下賜するのである。これは〈アメ〉と〈ムチ〉とを使って、(6)女帝が近習内侍たちを操縦しているのであり、さらに、女帝の「関白殿の参りたまふならでは、御手水の間・朝餉などに（男ノ）影さすこともな」（巻五[4]十七）いという方針が、四人の近習内侍たちの「男といふものを、御簾の隔てなくて見じ聞かじ、と思ひたる心ざま」（巻六[5]一〇二）と合致しているのであって、それは女帝の教育の成果であり、いわば女帝が〈政治管理〉のみならず、〈人間管理〉においても傑出していたことが物語られているといえよう。

また、

○丹波の内侍は、よしなき物まねびして、失せ消ゆまじかりける身と、今日よりぞ声もかたちも出できて、女官呼びて台盤の上拭はせ、さきざきも語らひつけたる女孺に、「南殿めでたく掃け」と言ひ知らせ、主殿の官人の朝清め心に入れたるに、身におはぬ単襲とらせなど、いたらぬ隈なく、百敷のうち塵ひとつも有るまじう言ひ聞かせける。（巻六[5]一一〇）

とあり、女帝の崩御後に、丹波の内侍は出家し、昇天して兜率天の内院に赴いても、「丹波の天人は、今も神上姿まして清げにて、如意殿掃き廻りて」（巻六[5]一四一）とあるごとく、丹波の内侍が清掃に精力を傾けているのも、女帝の教育の賜物であると考えられる。

さらに、女帝が前斎宮に対して経済的援助をしたために、

○いかでかおはしまさましと、（女帝ノ）げに有り難き御心おきてにぞ、（前斎宮ノ）御後見も心変りせず仕うまつりければ、まことに目やすき宮のうちなり。（巻六5一二六）

とあり、女帝は「あやしく数ならぬ際までもらさず御覧じかけ」（巻七6一八）たために、悲恋帝の述懐として、

○「先帝（＝女帝）おはしましし御さまの、いたく思ひ出でられて、恋しくおはします。……春宮（注―藤壺中宮所生の二宮で、後に今上帝）をさしも思しめしたりしかど、をさなかりしより、つゆばかりの事にもけぢめなく、同じやうにもてなさせたまひしがうれしかりしも、……」とて、……（巻七6三九）

と、女帝が区別なく人々を扱ったと語られているわけだが、これも女帝の人間操縦術を端的に物語るものであろう。

それに対して、我身姫（我身帝中宮、後の我身女院）の娘である一品宮（後に皇太后）に宮中将が恋慕し、その侍女である大弐の君を通して恋文を届けさせるが、一品宮は見向きもせず、今まで身近かで用をさせていた大弐の君を退けている。それは母親である我身姫の男を排除しようとする教育のなせるわざではあるが、一品宮の大弐の君への態度は〈ムチ〉のみであって、〈アメ〉の部分が欠如しており、女帝のやり方とは余りにも対照的であり、いわば、一品宮の心の狭さが照射されているのである。とすれば、そこに女帝の突出した人間操縦術が浮き彫りにされていることになろう。

ところで、この女帝の造型は何に由来するのであろうか。高倉帝を産んだ建春門院（注―平滋子。父・兵部大輔平時信、母・権中納言藤原顕頼女祐子）は中藹以下の侍女の身分から苦労して女御・国母、女院にまで昇りつめていったわけだが、その建春門院とは異なり、嵯峨帝皇女（注―母は三位中将〈後に関白〉の妹で、後に嵯峨女院）として何の苦労もなく三条帝に入内し、女帝にまでなった皇女が〈アメ〉と〈ムチ〉とを巧妙に操作する人間操縦術をどのように身に付けたのかに関しては、『我身にたどる姫君』の中では、明確にしがたいものの、女帝の造型に建春門院のあり方が影響を与えたのではなかろうか。とすれば、作者は『たまきはる』を参考にしたと考えられよう。

と同時に、前斎宮の屋敷では、

○（小宰相の君ニ兄ノ兵衛佐ガ贈ッタ物ヲ、前斎宮ガ）主よりはまづさきに開け散らして、……（巻六5三〇）

○出で代る僧の装束、もの好ましうせさせたまふ。「呉服よ、呉服よ」ともてさわがる。また、をりをりのきりの女房の事まで隙なく（前斎宮ガ）仰せらるるに、……（巻六5五二）

○（大弐の君ガ新宰相の典侍ノ所ヘ行クノニ）「かねて案内も言はず、後涼殿の西ざまに入り来て、……（新宰相の典侍付キノ侍女ハ）まづ消息などぞあるべかりける、あなあやし、と思へど、……（巻六5七一）

○（四位少将ナドノ朗詠ハ）忍びやかなるものから、声のほどはいとよう聞ゆるに、「あなめでた。こは誰そ誰そ」とぞ、（大弐の君ハ）御簾を引き寄せてさわぐ。（巻六5七二）

○年ごろことなど（大弐の君ハ新宰相の典侍ニ）高やかにうち語らひて、……（同右。大弐の君が「高やかに言ふ」〈巻六5七三〉とあり、また、「声の高きを高名にて言ひ散らしければ」〈巻六5一一三〉とある）

などと語られているごとく、前斎宮自身はもちろんのこと、周囲の人々の生活態度や品性に問題があるのであって、侍女たちに対する教育が主人である前斎宮によって施されていないと考えられるところから、前斎宮は女帝とは異なり、〈人間の管理者〉という点からも、失格者であるとみなせよう。それは『たまきはる』における建春門院の厳格さとは対照的に、俊成の娘である健御前が再出仕した八条院御所の侍女たちが各自思い思いの衣装を身に付け、仕える人々の定員もなく、縁故を頼って適当に仕えており、塵が落ちていても誰も気にかけず、蔵に物資が欠如していても、八条院自身が気にする様子がないと語られているように、建春門院と八条院との間には余りにも大きな落差が生じているのである。とすれば、女帝と前斎宮とのあり方はいわば『たまきはる』における建春門院と八条院とのそれに類似しているのであり、女帝と前斎宮とのあり方に『たまきはる』が大きな影響を及ぼしたのではないかと考えられよう。

ちなみに、作者健御前の没年は定かではないが、『明月記』寛喜二年（一二三〇）九月十三日条に高松院大納言（六角尼上）以外の健御前を含む他の兄弟姉妹たちが七十歳未満で死去していることが記されており、さらに健御前は、『明月記』元久元年（一二〇四）十二月二日条に「四十八」と年齢が記されている点から逆算すると、保元二年（一一五七）に生まれたと推測される。前述の記事により、健御前は七十歳未満で死去したと考えられる点から、嘉禄二年（一二二六）までには死去したと推測されるわけだが、[7]一方、『我身にたどる姫君』は文永八年（一二七一）に成立した『風葉集』には物語中の和歌が採られていないということから、それ以降の成立と考えられるので、『我身にたどる姫君』の作者は『たまきはる』における建春門院と八条院という二人の対照的な記事を参考にして、女帝と前斎宮とを造型したのではなかろうか。

以上のことから、女帝と前斎宮とは〈政治〉と〈性〉という異なる領域ではあっても、〈政権力〉と〈性権力〉を行使する〈管理者〉という点では類似していると同時に、〈人間教育の管理者〉という立場から考えると、女帝と前斎宮とは余りにも対照的なのである。とすれば、両者のあり方は従来のように単純に把握すべきではなく、〈類似〉と〈対照〉とが混在していると理解すべきだろう。

三

今まで指摘してきた前斎宮の〈性の管理者〉という一面は、実は三位中将と結婚した女四宮（水尾帝と水尾中宮〈後の水尾女院〉との娘）にその前例を見ることができよう。女四宮には「聞きならはず、あさましきまでさがなげなる御癖」[8]があって、「露ばかりも隔てあり、いぶせからん筋は、堪へたまふまじく、身もいたづらになるばかり（三位中将ニ）まつはれ恨みたまふ」（以上、巻三[2]一三二）わけだが、三位中将の女性関係について、

○心にくく、我はと思はん辺りなりとも、まして並々ならずあやしからん山賤の中にもあれ、かうともきこえ、その人とも許したまはんには、さらにさがなくにくげなる御心もなし。（巻三[2]一三三）

とあるように、女四宮自身が掌握している視界内のことであれば寛大ではあるものの、目の届かない視界外のこととなると、

○人をも身をもいたづらになすばかり、泣きこがれ恨みまつはれしたまふに、

（三位中将ニトッテハ）いみじうぞ苦しきや。

○すこしもあやしと思ふ事あれば、日暮し二日三日も泣き恨みたまふに、……

（以上、巻三②一二三）

○（三位中将ガ）心にもあらぬ口ずさびなどに、いかばかりの事を心にしめたらんと、すずろに隔てあり、あやしう思さるるままに、さるまじきよしなし事を疑ひ恨み泣きたまふ。……あらぬ人の心地して、日暮し取り籠められて語らひ暮したまふぞ、……（巻三②一五三）

と傍線部で語られているように、女四宮の嫉妬も手伝ってか、夫である三位中将に対して〈性の管理者〉たろうとする姿勢を女四宮は顕在化させるのである。

特に、三位中将は「女三宮の前栽見たまひし夕べ」（巻一①七七）より魅了され続け、二人の間に逢瀬があったものの、水尾帝の要請で三位中将の父親と結婚した女三宮（父・水尾帝、母・故院の娘皇后宮、後に入道宮）を忘れられず、「よとともに命にかふばかり思ひ惑ふ宮（＝女三宮）の御さまにいとかよひたまへる」（巻二②三三）対の君（＝我身姫）の気配が女三宮のそれと二重写しとなって、「（対の君ノ）御袖を引き寄せて」（巻三②一六一）近付いたところ、対の君の香が女三宮のそれと同様であったために、耐え切れずに、対の君の袖に三位中将は自分のそれを重ねただけなのに、対の君の〈移り香〉を女四宮は女三宮のものと錯覚したのである。というのは、女四宮と女三宮[9]とは「さるは異人といふべくもあらざりければ、いとよう馴れきこえたまへるあたりにて」（巻三②一七二）とあるごとく、異母姉妹で親密な関係であるにもかかわらず、女四宮の母（水尾中宮）は「故大殿の思しいつきし御名残に、いたうおごりて、帝・関白をはじめ、我が聞えたまはんことを、いささかもとどこほるべきものとは思しかけぬ」（巻二②一〇二）と語られているように高圧的で、さらに「御心のさがな」（巻四③五三―五四）い性格であったために、女三宮の母である皇后宮所生の一宮（後に嵯峨院）が水尾中宮所生の三宮（後に我身院）に先立って東宮位に即いたことが原因で、中宮は皇后宮を敵視しており、中宮の兄の関白が女三宮と結婚した結果、女三宮を「をしたちていとようもて消たんあたり」（巻三②一五二）と中宮の心中が語られているごとく、そのような中宮の姿勢が娘の女四宮に影響して、女三宮のこととなると、女四宮は闘争的になったからなのではなかろうか。

そのことは、

○ただよそながらの御袖のうへは、（三位中将ガ）思ひよる程ならぬにたゆみて、（女四宮ガ）例のいたうまつはされたまふに、所せき御匂ひは、世の常の薫物・香の香にもあらず、染みかへりたぐひなきを、ふととがめて、……「さばかり聞き所なくすずろなるすさびをだに、へだてなきよしつくりて、（三位中将ガ）いとよう語らひなしたまふを、いかばかり言ひ契りたる仲なれば、さばかりは揭焉に、思ひだによらずとかけ離れたまふらん」と、（女四宮ガ三位中将ニ）返す返す言ひてもあまりあるに、はては言の葉もなくて、（女四宮ハ）身も堪へがたげに泣きもまれたまふを、……例のもまれこがれたまふに、……「その火、しばし取りのけよ」と（女四宮ガ）のたまふ。例の事出で来にけりと（侍女ハ）思ひて、やをら（火ヲ）取り出づ。ことともなく（女四宮ハ三位中将ニ）取りつきて、抓み喰ひなどしたまへど、果て果ては「痛し、悲し」とも言はず、（三位中将ハ）打ち笑ひて臥したまへるに、（女四宮ハ）さすがに言ひわびて、捉へて寝たまひぬ。（巻三②一七一―一七三）

と語られており、「『その袖の匂ひは、よく知りたり』」（巻三②一七四）と女四宮が三位中将に明言しているごとく、対の君の〈移り香〉を女三宮のものと誤解しているわけだが、女四宮は三位中将と女三宮との情交を空想して、三位中将に悪態をついた挙句、三位中将の〈性〉を自分の側に取り戻そうとして、傍線部㋑のごとく、女四宮は三位中将に共寝を強制し、それは女四宮の日常的な行動であると考えられはするものの、傍線部㋺から三位中将は女四宮の行動になすすべもなく苦笑して、三位中将は女四宮に抱擁されるのである。これは女四宮の女三宮に対する嫉妬の先鋭化が三位中将の身体を独占したいという欲望を引き起こしているわけだが、女四宮は冗談にせよ三位中将が驚愕するほど、「『まづ御妻の色めかしさを知りたまへかし』」と語っている点や、「『昼は誰床や持ちたまへる』と、さし寄りてのたまふ」（以上、巻三②一七五）とささやいている点に表象されているごとく、三位中将の〈性〉を支配したかったからであり、女四宮が三位中将に対して〈性の管理者〉たらんとしているのだ。

さらに、

○（三位中将ガ女四宮ノ部屋ニ）入りたまひぬれば、（女四宮ハ）例のあたりもこぼるばかり愛敬づきたるさまして、更けぬる憎さにや、目も見合せたまはず。……例の（三位中将ガ女四宮ヲ）引きみだしきこえたまへど、つれなうもてなして、御腕をいといたう抓みたまへば、……「何をして今まで帰らぬ。愛敬なしの」と喰ひ抓みたまふに、（三位中将ハ）まめやかにいと堪へがたし。……「めでたき人（＝女三宮）の移り香に染みたる人は、一人ぞ寝たる」とまろび出でたまへば、……（女四宮ハ三位中将ヲ）夜すがら日ぐらし取り籠めて、誓言を立てさせ、……明けぬれど、取り籠められて、（三位中将ハ）え歩きたまはず。（巻三②一九六―一九七）

と語られているように、これも女四宮が対の君の〈移り香〉を女三宮のものと誤解して、激怒し、二個所の傍線部のごとく、三位中将に悪態をつき、二重傍線部から三位中将の行動を拘束するのである。とすれば、前述したことと同様に波線部の〈移り香〉が女四宮にとって神経を先鋭化させる〈性〉の表象だったのであり、女四宮像を考える際には、〈性〉との関わりを等閑にすべきではなかろう。

以上のように、女四宮は三位中将という〈夫〉の〈性〉の〈管理者〉たろうとしているのであり、そこに〈性の管理者〉としての女四宮の立場が鮮明に刻印されているのである。その点において前斎宮の〈性の管理者〉たらんとする状況と軌を一にしているわけだが、前斎宮が〈男〉と〈女〉との両方の〈性〉の〈管理者〉たろうとしているのに対して、女四宮は〈夫〉である〈男〉の〈性〉の〈管理者〉になろうとしており、そこに差異はあるものの、二人とも〈性の管理者〉であるという点が重要なのだ。とすれば、従来余り言及されることはなかったが、前斎宮の造型の前段階としての女四宮の存在を重視すべきであり、それを起点として前斎宮の〈性の管理者〉としての立場が変奏的にかつ膨張的に語られている点を看過すべきではなかろう。

四

女帝亡き後、悲恋帝は一品宮（後に皇太后）への不様な恋死を遂げ、その後を継いだ今上帝（三条帝の藤壺中宮所生の二宮で、女帝の養子）は「いか

でこの道（注―女性関係）に人の謗り負はず、何事につけても、ただ世の政すなほに、民安からむこと作り出ださむとのみ、夜昼御心にかけ」（巻八⑥一四三）た結果、「かばかりめやすき御代」（巻八⑥一四九）を招来したのである。とすれば、今上帝は女帝の辿った〈聖帝〉を再来せしめたことになろう。[10] だからこそ、今上帝が罹病した際、八月十五夜に故女帝が出現して、今上帝の「御薬などむつかしかりける御なやみは、跡形もなくつやつやとならせたま」（巻八⑥一五一）うたと語られているように、快癒し、女帝には子供がいなかったために、「今の二宮を、皇后宮（＝藤壺皇后）にせちに聞えさせたま」（巻四③一四三）い、養子となった今上帝の在位を三十六年と予言したのである。[11] 天女となった故女帝は今上帝を自分のかわりとして〈聖代〉を継承させ、今上帝もその意を汲んで、

○（殿の中将〈後に左大臣〉ト麗景殿女御トノ秘密ノ娘デアル忍草姫君ガ入内シタ折）むげにいはけなき御程なれど、山口しるき御さま、（今上帝ハ）なにがしの色に逢はじとぞ、思しめし疎みしかど、げに岩木にあらざりけんにや、御もの忘れもこよなけれど、あながちに思しめし返しつつ、朝政はたゆませたまはず。……うちしきり、院たち宮々、数多くおはします。御封をはじめ、御荘何やかやと、数さへ多かるままに、国々もいみじう所狭がりしを、かたへは省き停めさせたまふ。嵯峨の女院の昔の御伝はりは、当代に奉らせたまへりしなどを、皆停めて、国々の衰へをいみじういたはらせたまふ。（巻八⑥一八一）

における二個所の傍線部のごとく、政務に励み、また、

○古上達部など失せたまへど、替りもなされず、上達部の数多かるは寛平の御諫めのままに、などのみ思しおきてたれば、いささかの事もうち乱れず、色あひなきまで、過差などいふ事失せ消えためり。[12] ただ道々の詣り深き事のみ御心にしめて、その才あらはれたる人は、あつき御顧みあれば、大学・勧学などいひて、影形なかりし事、ただ昔ばかりに興したてられて、高き家の子ども、雪を集め、螢を拾ひけり。（巻八⑥一八一―一八二）

とあるように、ぜいたくをなくし、各々の方面で頭角を現した人間や学問を重視したと語られており、女帝時代の〈聖代〉の再来が企図されているのだ。とすれば、今上帝における故女帝の登場は〈聖代〉を復活させようとしたものであり、死後においても自分の養子である今上帝を〈聖帝〉として長きにわたって存続させようと導こうとしたと語られているのだ。そのためには前斎宮、特に悲恋帝という愚者の存在が必要であり、悲恋帝と今上帝という兄弟の二人の落差を語ることが、今上帝の〈聖代〉を浮き彫りにするためにも、悲恋帝の登場が不可欠だったのだ。

ところで、巻八結末は前斎宮に同性愛の相手としてかつて寵愛された侍女の小宰相の君のことで擱筆されているわけだが、「右の大殿の御乳母の[13]めい」（巻八⑥二一二）に当たる小宰相の君は、藤壺皇后所生の三宮（後に東宮）と結婚した御息所である初草姫君（後涼殿女御と宮中将との秘密の子）に再出仕して、「いとめやすく思ふやうなる人にて、この御方（＝初草姫君）の事おとなおとなしく言ひおきて、参る人に会ひなどし」（巻八⑥二一二）て、管理能力のある有能な侍女として語られ、そのことは結末部分においても「さぶらふ所の御几帳・壁代・童・はした者、御調度や何やかやと、いと真心に言ひおきてければ、をばもいみじう誉めきてぞさぶらひつきにける」（巻八⑥二一二―二一三）とあるごとく、有能な侍女として御息所のもとで采配を振るったのであり、それは女帝付きの丹波の内侍などの近習

者たちとの姿に重なるのであって、最後に有能な侍女という点において女帝を想起させる機能を帯びているのがこの小宰相の君だったのだ。と同時に、「もとよりみさをなだらか」（巻八⑥二一二）であったために、小宰相の君が再度取り上げられたともいえようが、そこには将来この東宮が即位した折には、今上帝と同様〈聖帝〉となる可能性が暗示されているのではなかろうか。いわば、帝並びにその配偶者に〈管理能力〉のある有能な侍女が出仕していれば、女帝の例からも東宮が即位した暁には〈聖帝〉となる可能性が内包されていると語られようとしたのではないかと考えられる。

注（1）辛島正雄「『我身にたどる姫君』の女帝と前斎宮とをめぐる断章―レズビアン物語の示唆するもの」（『中世王朝物語史論』上巻第Ⅱ部五　笠間書院　二〇〇一・5。初出、「文学論輯」第三十八号　一九九三・3）

（2）小島明子「女院文化圏と『我身にたどる姫君』―前斎宮の問題を中心に―」（「国語国文」二〇〇五・12）が要領よくまとめて説明している。

（3）本文は今井源衛・春秋会編『我身にたどる姫君』（桜楓社　一九八三・4―10）により、四角で囲んだ算用数字は分冊の番号、漢数字は当該ページ数を示す。なお、私に表記の一部を改めた個所がある。

（4）注（3）前掲書の【語釈】

（5）大倉「〈女すすみ〉の文学史」（「解釈」二〇〇八・3＝4）

（6）『たまきはる』においても〈アメ〉と〈ムチ〉とを使って建春門院が侍女たちを掌握していたことを指摘したことがある（『中世日記紀行文学全評釈集成』第二巻所収『たまきはる』勉誠出版　二〇〇四・12）。なお、『たまきはる』の本作品への影響を指摘したものに、辛島正雄（「中世擬古物語研究への一視点―『浅茅が露』『増鏡』所見の類話のことなど―」《『中世王朝物語史論』下巻第Ⅴ部八　笠間書院　二〇〇一・9》）があり、小島明子（注（2）前掲論文）も論じている。

（7）注（6）大倉前掲書に触れておいた。

（8）女四宮の結婚当初の様子は「あくまで子めき愛敬づきたまへる人の、いと誇りかに思ふ事なきさまして、いみじからん罪もえうとむまじう、らうたうけぢかきさまぞしたまへる」（巻三②一二六）の傍線部に「癖」の伏線が語られていると、注（3）前掲書【語釈】は指摘している。

（9）徳満澄雄は『我身にたどる姫君物語全註解』（有精堂　一九八〇・7）は【注釈】の項で、傍線部は女三宮ではなく対の君とする。

（10）金光桂子（「『我身にたどる姫君』の描く歴史（上）」「国語国文」二〇〇〇・9）は、三条帝（巻四）→女帝（巻五・六）→悲恋帝（巻七）→今上帝（巻八）という変遷は、一代ごとに帝の賢愚性が入れ変わる形になっていると指摘している。

（11）金光桂子（「『我身にたどる姫君』の聖代描写の意義」「国語国文」二〇〇一・4）は醍醐天皇の在位三十三年を意識して、それを上回るように設定したのではないかと推測している。

（12）諸本は「みほく」とあり、徳満（注（9）前掲書）は「みろく」と改訂して「弥勒」の字を当て、『鎌倉時代物語集成』（第七巻）は「みち〳〵カ」としている。

（13）小宰相の君は既に「（前斎宮ノ）乳母の縁にて参りたりし人」（巻六⑤二二）と説明されており、矛盾するわけだが、右大臣はかつての宮中将であり、右大臣の父式部卿宮と前斎宮の父嵯峨院とは兄弟（母、故院の娘皇后宮）であって、右大臣と前斎宮とは従兄妹同士であるという点と何らかの関わりがあるのではなかろうか。

（おおくら　ひろし　日本語日本文学科）